

研究報告

当文学部関係教職員、本学年度刊行の著書を対象

書評

尾形裕康 著

「新版 日本教育通史」

日本教育史の研究は近年著しい進歩を示したが、これとともに優れた通史を要望する機運も高まっている。通史は単に日本教育史を初めて学ぶ者にとって必要であるばかりでなく、専門の研究者にとっても優れた通史は座右の書として欠くことのできないものである。ところが通史の著作は決して容易ではなく、想像以上に困難なものである。優れた通史は、高い識見をもって多くの先行研究を総括整理し、歴史の潮流を正しく把握して、その大綱を誤りなく、また偏することなく、叙述しなければならぬからである。日本教育史について見ると、ある時代、ある領域の通史的著作も多いが、その中には教育史上の史実や事件を便宜的、一面的に選択し、あるいは特定の立場から評価したものも少なくない。これらは通史としての基本的な性格を欠如しているものといえよう。日本教育史の特定の領域や問題について、近年精細な研究が多数発表され、その点で日本教育史研究の進歩は著しいが、これと並んで、これらの成果を十分にとり入れた通史の著述、その研究が必要となつてゐる。すなわち通史もまた日本教育史研究の一つの重要な部門であるといえるのである。

日本教育史の通史として、わが国で最初に刊行されたものは「日本教育史

略」(文部省、明治十年八月刊)であるとされている。この書の序には「欧米各国皆教育ノ史有リテ我カ邦ハ未コレ有ラスコレ有ルコト此ノ編ヨリ肇マル」と述べている。本書は明治九年(一八七六)にフィラデルフィアで開催された米国立百年記念博覧会に出品するために編集されたものであり、まず英文で同年ニューヨークで出版されている。すなわち「An Outline History of Japanese Education, 1876」がそれである。そして翌明治十年に邦文で出版されたのが「日本教育史略」である。しかし本書は日本教育史上の主要な事項について、年代順に排列して概説したものであり、十分に体系的に編集された通史とはいえない。これに対して、明治中期に出版された佐藤誠実編「日本教育史」(上下二巻、上巻明治二十三年、下巻明治二十四年、修訂版一巻、明治三十六年、文部省刊)は、体系的に叙述された最初の日本教育史の通史と見るべきものである。この書は古事類苑の編集長をも勤めた碩学佐藤誠実の著作であり、この後これに勝るものがないといわれるほどの古典的名著である。その後吉田熊次著「本邦教育史概説」(大正十一年)、高橋俊乗著「日本教育史」(大正十二年)、同「日本教育文化史」(昭和八年)、海後宗臣他著「日本教育史」(昭和

仲

新

十三年）などがあらわれ、それぞれ特色のある通史として親しまれてきた。ところが第二次大戦後は、先に述べたように、特定の領域や問題についての精細な専門的研究は多数発表されたが、通史として見るべきものがなかった。ことに教育史の大家による個人の著作としての通史がなく、長らく渴望されていたのである。そこにあらわれたのが、尾形裕康博士著「日本教育通史」（昭和三十五年）であった。

尾形博士著の「新版 日本教育通史」（昭和四十七年）は、右の旧著を改訂増補したものであり、著者のその後の研究と新しい構想の下に書き改めた部分も多く、前著を継承しつつ、さらに完璧を期して本書の完成を見たのである。

著者尾形博士は多くの優れた業績によって学界から高く評価されている日本教育史の権威であり、学界の長老である。この人にして初めてこの書ありの感が深い。本書はさきに述べた佐藤誠実の「日本教育史」を模範としつつ、日本教育史に関するその後の研究と著者の識見に基づいて著述されたものであり、確実な典拠をかがけて論述する考証的立場にとくに特色が示されている。また佐藤誠実の「日本教育史」以後の時代についても取扱ひ、第二次大戦後の教育についても概略を叙述している。

本書は著者の見解に基づいて時代区分を行ない、全巻を四編から構成し、さらに時代を区分して各編をいくつかの章にわけている。本書の構成を明らかにするために、まず目次の要項を示せば次の通りである。

第一編 大陸文化依存の教育時代

第一章 古代の教育

第二章 奈良時代の教育

- (一) 奈良時代の文化と教育
- (二) 「大宝律令」の学制
- (三) 奈良時代の学校教育
- 四 奈良時代学校外の教育

第三章 平安時代の教育

- (一) 平安時代の文化と教育
- (二) 大学寮及び国学の変遷
- (三) 平安時代の私学
- 四 平安時代学校外の教育
- 第四章 鎌倉時代の教育
- (一) 鎌倉時代の文化と教育
- (二) 鎌倉時代の学校教育
- (三) 鎌倉時代学校外の教育

第二編 日本文化自覚の教育時代

第一章 吉野時代の教育

- (一) 吉野時代文化の特質
- (二) 日本教育の転換期

第二章 室町時代の教育

- (一) 室町時代の文化と教育
- (二) 室町時代の教育

第三章 江戸時代の教育

- (一) 江戸時代の社会体制と文化
- (二) 江戸時代の諸学派
- (三) 江戸時代の学校教育
- 四 江戸時代学校外の教育
- (四) 江戸時代の教育説

第三編 西洋文化摂取の教育時代

第一章 明治時代の教育

- (一) 明治前期の教育
- (二) 明治後期の教育
- (三) 明治年代の教育思想及び学説

第二章 大正時代の教育

- (一) 大正の社会情勢と教育
- (二) 学制問題
- (三) 大正年代の教育思想及び学説

第四編 現代の教育

第一章 昭和前期の教育

第二章 戦後の教育

日本教育通史略年表

右の目次のように、本書は(一)大陸文化依存の時代(古代・奈良・平安・鎌倉)、(二)日本文化自覚の時代(吉野・室町・江戸)、(三)西洋文化摂取の時代(明

治・大正）、戦前現代（昭和前期・戦後）に時代を区分している。これは著者独自の識見に基づく時代区分であると思われるべきであり、ここに著者の日本教育史観が表明されているといえるであろう。なお本書は上欄に詳細に典拠を注記している点に特色があり、これは佐藤誠実の「日本教育史」の体裁を継承しているといえる。また各時代、各章ごとに貴重な史料の写真を取め、参考文献をかがけていることも読者にとって極めて有益である。さらに巻末には要を得た略年表と索引がかけられ、読者の便をはかっている。

通史は入門書であると同時に高度な研究の成果である。時代史、問題史、伝記、沿革史、特定領域の研究など、すべてを総合して集大成し、かつこれを均斉のとれた形に要約したものである。したがって優れた通史の著作は決して容易なことではなく、その道の大家にして初めて可能なものであることはすでに述べたところである。しかし一方から見れば、通史をどのように編集著述するかということも重要な研究課題である。その意味で尾形博士の名著「新版 日本教育通史」の出版を契機として日本教育史の通史研究が興隆することを期待するのである。このことは優れた特殊研究をさらに発展させる基礎ともなるであらう。（東京大学教授・教育学博士）

「新版 日本教育通史」A5判・三六〇頁・定価一、九〇〇円
早稲田大学出版部発行